

建造物の移築に伴う周辺整備と庭園の移転

—昭和期に活躍した森蘊の業績を通して—

エマニュエル・マレス（京都産業大学）

1. はじめに

(1) 移築と庭園

日本では、建造物の移築や古材の再利用などはごく普通に行われることである。古代の法隆寺伝法堂や唐招提寺講堂などから、現代の民家再生に至るまで事例を羅列しだしたらキリがない。とにかく、建物を解体し、材料を移動させ、他所で組みなおすことができるのは木造建築の特徴の一つであると言える。

しかし、単独で建物を移築することが可能でも、その周辺の環境は基本的に移動不可能である。実際に、建造物の移築がよくみられても、庭園の移転は極めて稀である。京都の圓徳院庭園や妙満寺庭園、奈良の法華寺庭園など「移築」や「うつし」の伝承がないわけではないが、いずれも資料不足で伝承の域をでない。

日本庭園史において、醍醐寺三宝院庭園の藤戸石のように、当時の「天下人が所有する石」として繰り返して京都の名庭で移設された庭石の事例はある。近代に流通した社寺の礎石（伽藍石）もその好例。しかし、庭石や庭木などは技術的に動かせたとしても、庭園を構成するすべての要素（築地塀のような構造物、土壌、地形、水、周辺の景色、気候など）は移動不可能である。

「庭屋一如」と言われるように、本来ならば建造物と庭園は切り離せないものであるが、実際には保護や再利用などを目的で庭園内にある建物だけが解体され、移築先で新たな庭がつくられることが多い。

本稿では、昭和期に活躍した日本庭園の歴史家であり、作庭家でもあった^{もりおさむ}森蘊（1905-1988）の業績を通して、建造物の移築に伴う周辺の整備（作庭）や庭園の移転復元、庭石の移設などについて考察を深めることにする。

なお、本稿では便宜上「移築」は建造物、「移転」は庭園、「移設」は庭石や庭木などの材料の移動という意味を込めて使い分けることにした。

(2) 森蘊の業績

森蘊は現代の日本庭園史学の基盤を築いた人物である。徹底的な文献資料の分析に加え、現地の厳密な測量と発掘調査の成果を取り入れたことによって学問としての日本庭園史の発展、または歴史的な庭園の保護に大いに寄与した。

一方で、森は生涯をつうじて積極的に作庭活動を続け、その数全国で約70庭園に及ぶ。こうして彼は歴史家として、また作庭家としても、建造物の移築に伴う周辺の整備（作庭）や庭園の移転復元などに携わるようになった。

2019年に発行された『森蘊研究報告書 昭和の作庭記—森蘊の業績と日本庭園史の作成』に明細な年表が掲載されている¹⁾。その中から建造物の移築に伴う周辺の整備（作庭）や庭園の移転復元に関連する庭園は9つを数えた（表1）。

まず、その9つの庭園が奈良県に位置していることが注目される。森は1952年に奈良文化財研究所の建造物室長になってから晩年までの36年間奈良を中心に活躍したので、奈良県内の文化財や史跡の環境整備をはじめ、寺院や民間などの作庭事例が多い。

表1 森蘊が関わった建造物の移築に伴う周辺整備と庭園の移転復元

和暦	西暦	庭園名	所在地	種類	施工
昭和32	1957	東大寺 龍蔵院庭園	奈良市雑司町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	花豊造園
昭和33	1958	法華寺「仔犬の庭」	奈良市法華寺町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	徳村造園
昭和39	1964	唐招提寺 御影堂庭園	奈良市五条町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	徳村造園
昭和41	1966	唐招提寺 三暎庵茶室露地	奈良市五条町	建造物の移築に伴う周辺整備／ 庭園の移転復元	徳村造園
昭和42	1967	橿原神宮 文華殿庭園	橿原市久米町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	徳村造園
昭和44	1969	郡山城跡 市民文化会館庭園	大和郡山市城内町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	不明
昭和44	1969	唐招提寺 東室庭園	奈良市五条町	移転復元	徳村造園
昭和45	1970	高宮勝邸庭園	天理市柳本町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	小山潔・古川三盛
昭和60	1985	法華寺東室庭園	奈良市法華寺町	建造物の移築に伴う周辺整備（作庭）	小山潔・木村光治・ 小山照夫・森下悟司

本項をまとめるに当たって、主な参考文献になったのは1973年に出版された『庭ひとすじ』²⁾である。森の自伝のような本で、森のそれまでの研究成果と作庭の活動がわかりやすくまとめられている。その中で、建造物の移築に伴う周辺の整備や庭園の移転の事例を紹介し、また奈良で作庭活動を始めた時の心構え、自分なりの作庭理念を解説している。

「奈良には古い寺が多い。こういう古刹に庭園を造る場合、モダン・アート（前衛的造型）をとってつけるわけにはいかない。そこで考えぬいたあげく、藤原時代（平安時代後期）の『作庭記』を近代的に解釈しようと決心した」ということから、森は奈良盆地という歴史的風土を強く意識していたことがわかる³⁾。当時、東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡庭園などがまだ発見されておらず、奈良時代の庭園の様相はあまり知られていなかった。そこで、森は日本庭園の最古の造園書『作庭記』を参考書として選んだ。しかし、最古だから選んだだけではない。森は日本庭園史上「三つの頂点を見出すことができる」と述べ、その「第一期は「作庭記」という不滅の金字塔を打ち立てた藤原時代」と位置付けた⁴⁾。森は日本庭園の原点であり、また絶頂でもあった寝殿造庭園を参考にしながら奈良で新しい庭を設計した。言い換えれば、過去に学びながら昭和期にふさわしい新しい日本庭園の姿を探ろうとしたが、「『作

庭記』を近代的に解釈する」というのは具体的にどういことだろうか。「外見は前衛的であっても、結局帰するところの理論は『作庭記』の内容に高らかに唱えられる自然順応精神であること、中には現在残っていない作庭記流庭園の復興的作品と見るべきものに含まれてくるのである」という⁵⁾。こうして、森によると「自然順応精神」が『作庭記』の根本理念であるが、それを「復興」する必要があるということから、一度失われた感覚であるとも示唆している。

歴史家として、森は自分の目の前に映る庭園や遺構の姿よりも、そこに隠された過去の面影、造営当時の地形や地物の形状、作者や作庭意図、庭園の実態や実用などを研究対象とした。つまり、古庭園の原点に戻ろうと「復元的考察」「復元的研究」「復元整備」を進めた。作庭家としても、森は長年の研究成果に基づいて「復興的作品」を試みた。「復元」「復興」などと言葉が変わっても、森の研究と作庭に通底するのは、過去の失われた庭園を蘇らせようとする姿勢なのではないだろうか。

こうして「復元」をライフワークとした森は、建造物の移築に伴う周辺の整備や庭園の移転をどのように考えていたのだろうか。移築と移転というのは、ある建物や庭を一度解体して新しい場所で「復元」させる移動方法である。しかし、移動先で何を「復

表2 本稿で採り上げる庭園のグループ分け

興福寺旧一乗院の移築に伴う周辺整備	
1957年	東大寺 龍蔵院庭園
1964年	唐招提寺 御影堂庭園
旧織田屋形（柳本陣屋）の移築に伴う周辺整備	
1967年	檀原神宮 文華殿庭園
1970年	高宮勝邸庭園
法華寺境内に移築された建造物の周辺整備	
1958年	法華寺「仔犬の庭」
1985年	法華寺 東室庭園
庭園の移転・石材の移設	
1966年	唐招提寺 三暎庵茶室露地
1969年	唐招提寺 東室庭園

元」するのだろうか。そもそも、環境が変われば「復元」と言えるのだろうか。

本稿では、森が関わった移築や移転の事業を分類して、8つの庭園を紹介する（表2）。年代順ではなく、移築された建物や移転された庭園の4つのグループに分類した。まずは、興福寺旧一乗院と旧織田屋形の移築に伴って新しくつくられた庭園。それから法華寺の境内に移築された住宅建築に合わせてつくられた庭園。最後に、京都から唐招提寺境内に移転復元された庭園を紹介する。

2. 興福寺旧一乗院の移築に伴う周辺整備

旧一乗院とは、奈良市登大路町に位置していた興福寺の別当坊であった。「南都一乗院宮」とも呼ばれ、格式の高い門跡寺院として知られていたが、明治期の廃仏毀釈運動により廃寺となった。その後は奈良県庁や奈良地方裁判所の庁舎として利用された。

旧一乗院の主な建造物は次第に解体され、芳徳寺、東大寺龍蔵院、唐招提寺などと奈良市内の寺院などに移築された。ここでは、東大寺龍蔵院と唐招提寺へ移築された建造物の周辺を、森がどのように整備したのかを検討する。

（1）東大寺 龍蔵院庭園

龍蔵院は大仏殿の北東に位置する、東大寺子院のひとつである。明治時代に一度取り壊されたが、戦後間もなく再建された。建物の一部は興福寺旧一乗院から移築されたもので、庭園は1957年に森が新しくつくった（図1）。

作庭前に、元興寺から多量の庭石を受け取り、また東大寺食堂の礎石を確保することができた。このような古材を活かしながら、森は建物を囲むように東から滝の石組、流れ、そして南に池を設けた。

「（前略）内側から見る地形は庭園と建築との相互関係とともに、どことなく修学院離宮下御茶屋の寿月観前庭のあたりに似かよっていて、好ましい条件だと思った。そこで設計図の完成をちょっと待ってもらって、橋本聖準師一家の人たちをさそい、一日初夏の修学院離宮から円通寺あたりを見学しながら、その現地についてあれこれと解説をし、いっぽう東北隅から小滝を落とし、遣水を南から西へまわし、小池をたたえ、山腹山麓には枯山水的の石組みをという私の構想を説明し、ほぼ同意を得ることができた」と森が作庭に至るまでの経緯を思い出している⁶⁾。

庭に面している主な建物が興福寺旧一乗院から移築されたことや、庭石が元興寺から移設されたことなどを特に考慮に入れていない。森の計画は旧一乗院の「復元」ではなく、龍蔵院という寺院・場所に

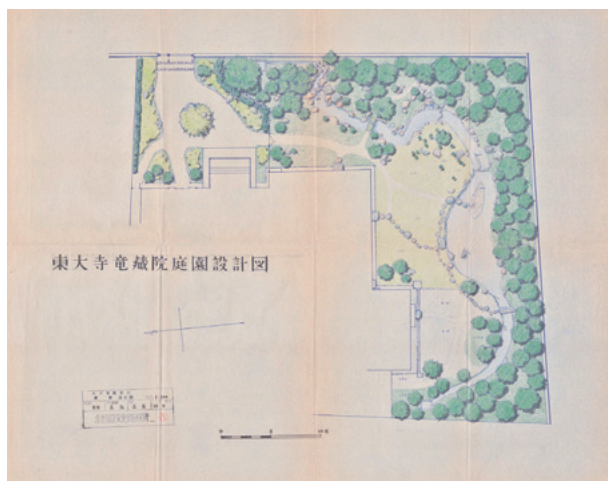


図1 森蘊による東大寺龍蔵院庭園設計図

ふさわしい庭をつくることであった。しかし、その新しい庭は京都の江戸初期の庭、修学院離宮の中御茶屋に見られるような軽快な流れと、円通寺庭園に見られるような周辺の自然環境との一体化をイメージしてつくられたことはまた興味深い。

さらに、北東から南西へと流れる水や、池の中央にある玉石を敷き詰めた中島と立石などは、平安時代の寝殿造庭園を彷彿させるデザインである。「はじめは作庭記流にと心がけて設計もし、施工も指導したが、池辺から池底につづく州浜の感じは、偶然にもちょうどそのころ平城宮跡の北方から見つかった玉石敷きとそっくりなつくりになった。また池中の立石は平泉毛越寺大泉池中の僧石を思い浮かべながら立てた。⁷⁾」長年の日本庭園史研究を踏まえ、森は理想としていた平安時代の寝殿造庭園や浄土庭園、また近世の王朝風の庭園、つまり「作庭記流」の庭園を参考にして龍蔵院の新しい庭園をつくりあげた(図2)。

残された記録を見る限り、森は移築された建物について一切触れていないのでどこまで意識していたかは明確ではないが、興福寺旧一乗院は摂関家の子弟や近衛家の門主などが入室する格式の高い門跡寺院であったことから、この庭園は移築に伴う「復元」ではなく「復興的作品」であるとも言えよう。

(2) 唐招提寺 御影堂庭園

1964年に奈良地方裁判所の新築に伴い、興福寺旧一乗院の宸殿と僧正門の2棟が唐招提寺の能満院の跡地に移築され、御影堂と改名された。建造物は慶



図2 東大寺龍蔵院庭園工事中(橋本聖圓撮影)

安2年(1649)築、宸殿(主屋)と対屋からなる寝殿造り風の建物であり、国の重要文化財に指定されている。移築の際に建物そのものは特に改造されなかったようだが、その名称と用途が大きく変わった。現在の御影堂には唐招提寺の開基・鑑真和上坐像(国宝)が奉安され、また東山魁夷によって新しく描かれた扉絵、襖絵、障壁画が収められている。周辺の庭園は森による新作である。

唐招提寺の御影堂庭園をつくるに先立って、森は1960年に(移築前の)興福寺旧一乗院の地形測量を実施し、その成果を古絵図と照合しながら「復原的考察」を行った⁸⁾。また建造物の解体後に行われた発掘調査にも立ち会い、造営当初の姿を明らかにしようとした。明治以降に庭園が大きく改造されたので、すべてを解明することはできなかったが、宸殿の前面(南庭)には平庭、背面(北庭)には池庭、そして南東には遣水があったことを確認することができた(図3)。この事前調査の成果は、その後でできた御影堂庭園に大きな影響を与えたと思われる。

「宸殿の前庭は古式にならって、左近橋、右近梅が植えられているだけで、そのほかには行事の支障になるような石も木もまったく使用されていない。

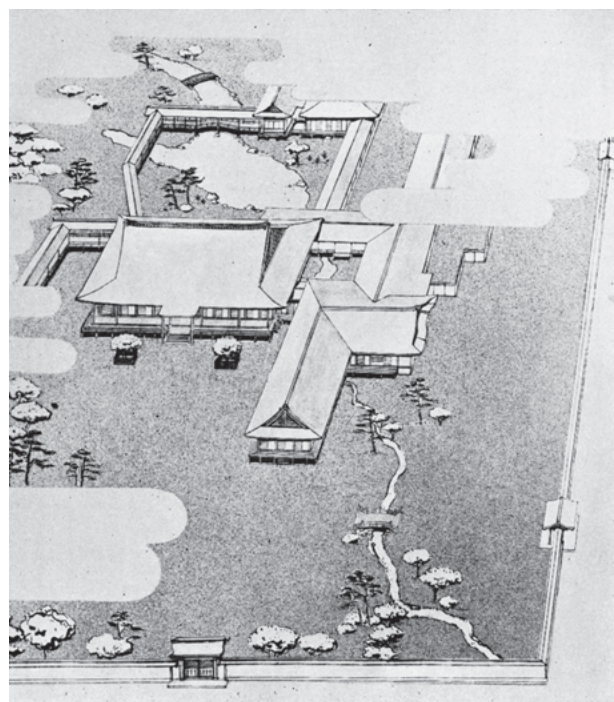


図3 「一乗院推定復原景観図」

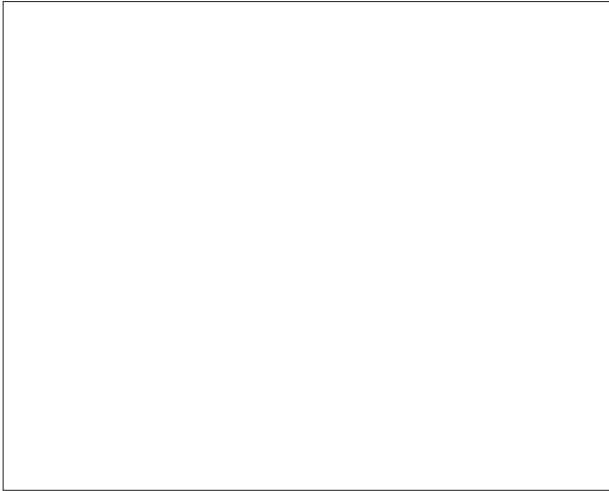


図4 唐招提寺御影堂の南庭

ただ宸殿の西南前方の1.5mほどの高さの松林だけは風致的取り扱いを兼ねて残し、そのまわりには大柄だが優雅な石組みを行ない、庭と仕切った。(中略)宸殿と一緒に一乗院跡から移築された東南方表入り口である僧正門から玄関までの間は、方形の切石を四半敷きに両側をかずら石で押さえた敷石道で、殿上東側には仁和寺流の立蔀風板塀を利用したという⁹⁾(図4、5)。唐招提寺では、森は前面の平庭を再生することができ、そこに平安時代以降に利用された「桜」ではなく、あえて古風の「梅」を植えた。しかし、背面の池や南東の遣水は結局復元できなかった。現在は宸殿の西側に切り石でつくられた矩形の蓮池と花壇があるが、それは唐招提寺で有名なハスやハギを育てるための措置であり、旧一乗院庭園とは無関係である。

唐招提寺の御影堂庭園の場合、森は移築前の庭園を調査したので「復元」、もしくは「再現」は不可能ではなかったが、結局は南庭以外、新しい場所(唐招提寺)と用途(御影堂)に合わせて整備をすることになった。南庭においても「西南前方の1.5mほどの高さの松林だけは風致的取り扱いを兼ねて残し」たということから、移築先の地形や環境に配慮していることがわかる。こうして、森は移築前の庭を意識しながらも移築後の環境に合わせて新しい庭をつくった。

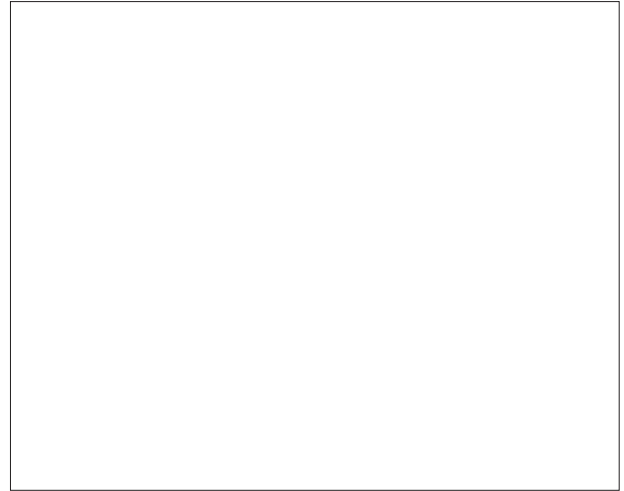


図5 唐招提寺御影堂の敷石道

3. 旧織田屋形(柳生陣屋)の移築に伴う周辺整備

旧織田屋形とは、天理市柳本町に位置していた織田有楽斎の五男・尚長(1596-1637)を藩祖とする柳本藩の屋敷であった。現存する主な建造物は天保15年(1844)に再建され、大名居館の貴重な遺構である。明治以降は長らく小学校として使用されていたが、1967年に小学校の新築に伴い、御殿が解体され、主な建物は檀原神宮や個人宅などに移築された。ここでは、檀原神宮と高宮邸に移築された建造物の周辺を、森がどのように整備したのかを検討する。

(1) 檀原神宮 文華殿

旧織田屋形のうち、大書院と玄関が檀原神宮の境内に移築された後、国の重要文化財に指定された。檀原神宮では「文華殿」と新しく命名され、文化施設や結婚式場などとして利用されるようになった。

建造物の移築後に奈良県文化財保存課を通じて、森に作庭の依頼が届いた。つまり、建造物の移築とその周辺の整備がまったく別の事業であったと思われる。

「文華殿が将来、文化的雅宴、芸能的集会などの場として利用されることを考えると、その玄関へ自家用車やバスなどのを着けるようになるだろう。(中略)書院南庭は、文華殿園中もっとも重要な区域である。(中略)低い築山を二個造り、(中略)猷

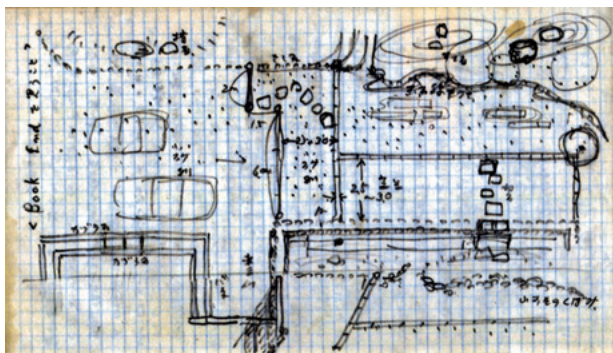


図6 森蘊による檀原神宮 文華殿庭園のスケッチ



図7 檀原神宮 文華殿（竣工当時の絵葉書写真）

納された大振りの富士石二個を配し、（中略）山裾には（中略）苔を伏せて枯山水を形成し“雲にそびゆる”深山という見立てで、丹波石で雲形に輪郭をとった。」¹⁰⁾

この場合、森は旧織田屋形という大名の居館を意識することなく、すべて新しい場所（檀原神宮）と新しい用途（文化施設）に合わせて、新しい庭を設計した。玄関の前は車やバスが近くまで入れるように砂利を敷き、また書院の前は「雲形」を設けたという。そのテーマを詳しく解説していないが「雲にそびゆる」というのは、神武天皇が即位したとされる紀元節祭に歌われていた唱歌「紀元節」の引用であることから、この庭園では神武東遷をイメージしていると言える（図6、7）。

移築される前の旧織田屋形は小学校として利用されていたから、その周辺は校庭として整備され、江戸時代の痕跡は残っていなかったからだろうか。いずれにせよ、この旧織田屋形の場合、森は移築され



図8 高宮邸の旧織田屋形建物の座敷（著者撮影）



図9 高宮邸庭園（著者撮影）

た大名居館の過去にとらわれず、檀原神宮の文華殿という新しい施設に合わせて庭園を考えようとしたことが明らかである¹¹⁾。

（2）高宮邸

檀原神宮の文華殿庭園ができた3年後の1970年に森は、高宮邸庭園をつくることになった。高宮邸というのは、天理柳本町の高宮勝医院長の住宅である。現在の天理市立柳本小学校の南、つまり旧織田屋形のすぐ近くに位置する。3,000㎡ほどある敷地の奥（西）に旧織田屋形から移築された1棟の建物（書院）があり、その手前（東）には新築の住宅が並ぶ。この場合、森はそれぞれの建物の性質に合わせて、異なった趣の庭をつくった。

「奥の座敷の南庭では、（中略）地形の盛り上がり順に応じた五個の捨石を配置し、苔に埋もれた小庭を風雅な四つ目垣で囲い、古建築との調和をはかった。（中略）そのほかの建物の周辺の空間をほとんどすべて枯山水的手法で統一し、（中略）巡遊鑑賞

できるようにしたのである。」¹²⁾

橿原神宮文華殿と高宮邸には同じ旧織田屋形の建物の一部が移築されているが、その周辺環境を整備するに当たって、森は異なったアプローチを選択したことが興味深い（図8、9）。

橿原神宮においては、移築された建物の歴史とその性質にとらわれず、神社の文化施設という新しい場所と用途に応じて庭を設計したのに対して、高宮邸では建造物に合わせて風致を添えた。旧織田屋形から移築された座敷の前庭は竹垣で囲み、その小さな空間に築山、梅、捨て石、蹲踞、などの伝統的な庭をつくった。旧織田屋形の古い庭園の姿がわからないのでいわゆる「復元」ではないが、江戸時代の庭園を意識した「復興的作品」であると言える。そして鉄筋コンクリートの新住宅の前は平庭とし、前面に芝生を敷いた近代的で明るい庭を設けた。

4. 法華寺境内に移築された建造物の 周辺整備

法華寺とは、平城宮跡の東に位置する尼門跡寺院である。奈良時代に総国分尼寺として開山されたが、戦国時代に荒廃した。慶長年間（1596-1615）に豊臣秀頼の寄進により復興され、また寛文年間（1661-1672）に後水尾上皇の皇女で近衛信尋の息女の高麗尼によって寺域が整えられ、京都御所から客殿と庭園が移築されたと伝わっている。国の名勝に指定されたこの池庭に関しては、仙洞御所の「うつし」との伝承があるが、それを「移し」と読むべきなのか、もしくは「写し」と解釈するべきなのか、明らかではない。ここでは、森がつくった「仔犬の庭」と東室庭園に焦点を当てる¹³⁾。

（1）法華寺「仔犬の庭」

1958年、法華寺門跡の開祖光明皇后の1200年祭に向けて、伽藍や客殿の修理が行われた。森は名勝庭園（当時は県指定）の整備を指導し、客殿（県指定文化財）の北西に境内の中から移築された「座敷」と、その続きに増築された茶室の前に新しい庭をつくった。移築前の「座敷」の歴史は明らかではないが、

移築後は当時の住職、久我高照門跡の住まいとなり、茶室と合わせて「庫裏」と呼ばれるようになった。1958年は戌年であったということと、法華寺の「お守り犬」に因んで森はこの庫裏前の庭を「仔犬の庭」と命名した。

「開祖光明皇后の1200年祭（中略）に合わすべく客殿も装いを新たにし、（中略）庭園に関してもその面目を一新させるべきなのは当然のことであって、県文化財指定を受けている池庭を整備し、庫裏の南側、新茶室への露地もこの際作りかえてほしいというご依頼を受けた。」¹⁴⁾

法華寺の「昭和の大修理」に合わせて、森は庭園を「一新させるべき」であったという。しかし、それは既存の文化財を修理して「綺麗にする」という意味なのか、それとも手を加えながら「一変させる」というニュアンスなのか、明らかではない。いずれにせよ、仔犬の庭の場合、森は移築された場所（文化財庭園の北側）とその用途（住職の新しい住まい・茶室の庭）に合わせて庭園の構想を練った（図10）。

「尼門跡の居室と茶室の南庭とは、すべて芝生とし、戸外室として、ときには野点の場所にも利用できるようにした。現在古池に流れ込んでいる水を、桝に呼び込んで濾過し、うまくやり水に利用することができれば申し分がない。」¹⁵⁾

じつは、仔犬の庭は後に名勝法華寺庭園の指定範囲内に収まる。森による「比丘尼御所の庭園としての主庭との取り合わせ」により、文化財としての副次的な価値も認められつつあるという。こうして、仔犬の庭は新しい環境にうまく溶け込んで、時間とともに同化しつつあるとも言えよう。

（2）法華寺 東室庭園

法華寺の東室と呼ばれる建物は、大阪府の中田家隠居から移築された近代の和風住宅である。移築前の建物に関する資料は見つかっていないので、詳細は明らかではないが、建物の材料はそのまま法華寺に移動され、復元されたようである。一方で、庭園の材料（庭石・庭木など）は一緒に移設されなかったようで、森が1985年に建造物の移築後に、新しい

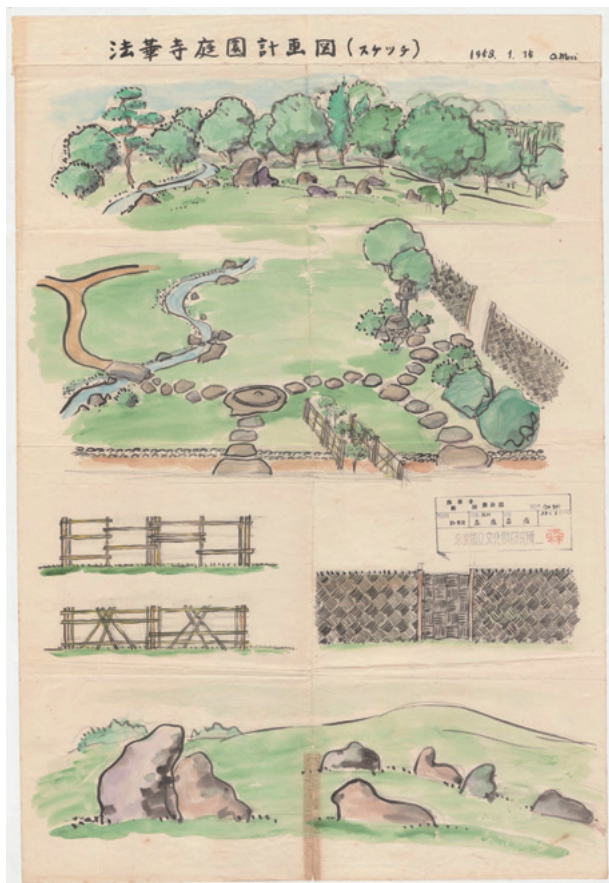


図10 森蘊による法華寺庭園設計図

材料を使いながら、新しい庭をつくった。

東室庭園は移築された建物の南に広がる枯山水である。中央の野筋に石組みを配置し、周囲に洗いジャミを敷いて回遊できるような園路が設けられた。建物の東側にある縁先手水鉢もその時に設置されたものである（図11）。

結局、仔犬の庭と東室庭園は、移築された建物に合わせてつくられた新しい庭園であるが、作庭をするに当たって庭石や庭木などの材料の移設がなかったようで、森がすべて移築先の新しい場所と用途に合わせて設計した。

5. 京都から唐招提寺境内に移転復元された庭園

先述したように、森は1964年に唐招提寺の境内に移築された興福寺旧一乗院の宸殿と僧正門の周辺を整備した。その際は建造物のみが移築され、庭園は移築先で新しい材料を使いながらつくられた。しか

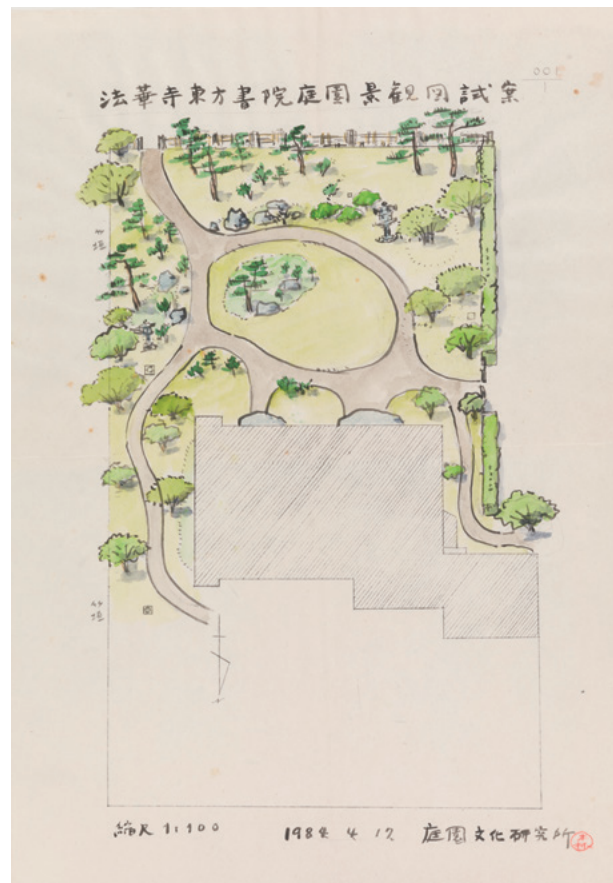


図11 法華寺東方書院庭園(東室庭園)景觀図 (法華寺蔵)

し、その数年後に森は2つの庭園そのものを唐招提寺に移転した。導入でも指摘したように、建造物の移築は一般的であっても、庭園の移転は極めて珍しいので、これらは貴重な事例になる。

森の自伝『庭ひとすじ』の中に「古庭園の発掘と復元」という章がある。そこで、森は庭園の移転に関する自分なりの考え方を明確に提示している。

「庭園の移転と一口にいっても、石さえ運搬すればそれでよいと考えたら大きな誤りである。もとの敷地とほぼ同大のきっちりとした敷地に、もとのままの相互間隔をおいて、立ち姿も完全に復元されるのでなければ、本当の意味の移転復元とはいえない。」¹⁶⁾ 言い換えれば、森にとって庭園の移転というのは「移動」だけではなく、「復元」でもあった。移築先で「完全に復元」するために、精密な調査と記録が必要であるという。こうして、森は強いこだわりがあったことが窺えるが、敷地の大きさと石材の立ち姿についてしか言及していない。石は日本庭

園の骨格をなすとよく言われるように、石材は非常に重要な役割を果たしているが、それが庭園のすべてではない。門や壁の建造物や植物なども庭園の重要な構成要素であるのに、森にとって庭園の移転は石の移転に要約されるようである。唐招提寺に残っている2つの事例をとおして、森が指導した庭園の「移転復元」を見てみよう。

(1) 唐招提寺 三暎庵茶室露地

1966年、京都から唐招提寺に茶室とその庭（露地）が唐招提寺に移築された。もとは京都の公家の建物の一部であったようだが、後に下鴨の蕪庵という中華料理店の所有となった。唐招提寺御影堂の東側の林の中に建物と庭園がともに移築・移転され、三暎庵と命名された。この移築・移転の事業について、森は次のように語っている。

「蕪庵は京都下鴨から移築された藪内流の由緒ある席で、ここに配置されている腰掛や、飛石などはすべてもともとから蕪庵に付属していたものばかりである。いうならば、場所こそ変わっているが、蕪庵の移転復元と見ても良い。¹⁷⁾」(図12)

森が残した記録を読む限り、唐招提寺の三暎庵露地は京都下鴨の蕪庵露地の「移転復元」であるが、移転前と移転後の記録は残していないので詳細は明らかではない。唐招提寺に移築前の写真が数枚保管されているが、それだけで全体像を把握することは難しく、敷地の大きさ、建物の配置や庭石との相互関係、木材の種類と位置などはわからない。本来、移転復元するためには事前の調査や精密な測量図などが必要であると思われるが、そのような資料が残っていないので、今や科学的根拠に基づく調査ができない。

(2) 唐招提寺 東室庭園

1969年、京都市上京区の妙蓮寺玉龍院庭園が唐招提寺の東室の前に移転された。この場合は建造物が移築されず、庭園のみの移転になった¹⁸⁾。

京都の妙蓮寺玉龍院は戦後から保育園の経営をはじめていたが、1968年に増築が必要となり、座敷とその前に広がる庭園を取り壊すことになった。しか

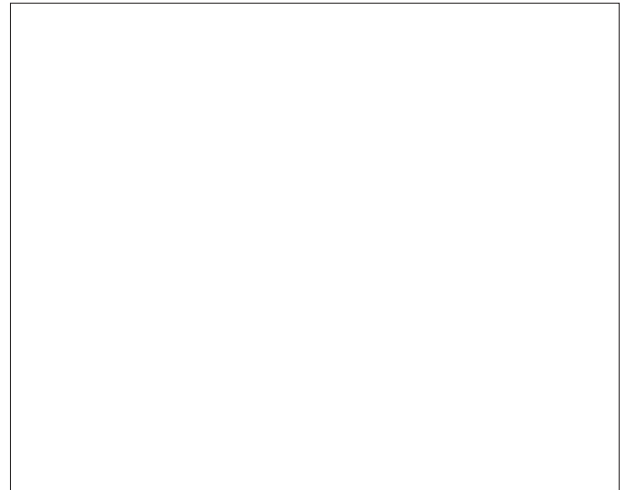


図12 唐招提寺三暎庵露地（奈良文化財研究所蔵）

し、これは保存すべき歴史的な庭園だと森が評価し、唐招提寺の森本孝順長老との協議の結果、奈良に移転することになった。

森が唐招提寺の東室庭園を選んだ理由は2つあるという。まずは、妙蓮寺玉龍院と同大の敷地であったこと。玉龍院で庭園は座敷の南西に面していたが、移転先の東室では建物の北東に面している。移転によって庭園の方位角は変わったが、長方形のL字型は活かされている。次に、唐招提寺の境内全体が国の史跡であり、東室は重要文化財として指定されていることから、その庭園は文化財の一部として保護されていくという点も重要な理由であった。

「地形の勾配と方位角とだけは少し違うが、(中略) 個々の石の間隔とか方向とか傾き加減などは、「寸分違わぬ」という言葉をあてはめてよい¹⁹⁾」。移転をするに当たって、森は敷地と地形、そして石の配置に細心の注意を払ったという。植栽に関して、在来の樹木を伐採したものもあれば、活かしたものもある。また「妙蓮寺椿」の苗木も移築先の庭で植えたというが、それは移転前の庭にあったものかどうか明らかではない。

妙蓮寺玉龍院庭園の場合、森は移転前と移転後について厳密な測量図を残しているので、移築後の庭園と比較することができる。移転前の図面(平面図・断面図)には15個の景石が精密に描かれ、それぞれに番号をつけた(図13)。移築先では、その記録に

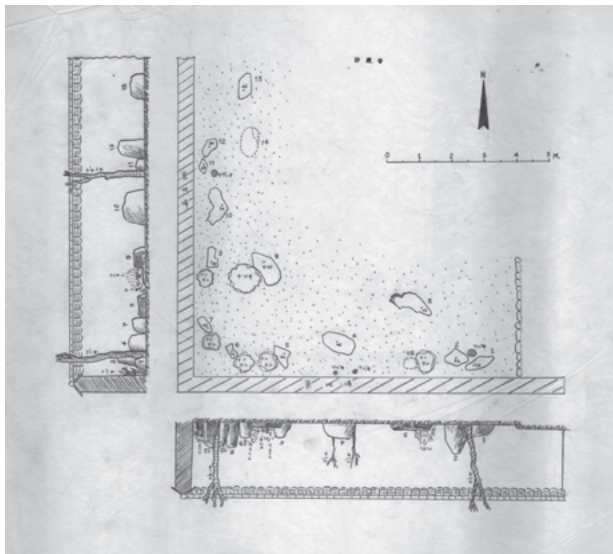


図13 移転前の妙蓮寺玉龍院庭園図面

基づいて石を正確に移転復元したことを確認することができる。

森は敷地や地形、また庭石の配置に細心の注意を払い、できるだけ忠実に移転復元した。しかし、移転前の妙蓮寺玉龍院庭園の図面と古写真を見比べると、森が図面に記録していない（そして移転していない）要素もいくつもあることに驚く。図14を見ればわかるように、森は座敷前の飛び石や景石の間に立つ石灯籠などのような石材を図面から省略している。移築をする際には必ず取捨選択する必要があると思われるが、森はそれらの要素について何も言及していない。その飛び石や石灯籠などは後世の改造によって追加された要素なので、移転するべきものではないと判断したのだろうか。それとも、移転先の庭にはふさわしくないと判断したのだろうか。残念ながら、その意図は明らかではない。

結局、森は庭園の構成要素を自由に取捨選択し、移転先で再構成した。こうして、庭園の移転は立地の変更だけでなく、形態の再構成という造営時の遺構としての価値の変更に繋がった。また、移転前の庭が江戸初期の座観式庭園であり、その座敷と密接な関係があったと思われるが、移築後は「東室」という鎌倉時代の建物で、障子などではなく、仏教建築の開き戸が付いているので、庭の鑑賞法も大きく



図14 移転前・妙蓮寺 玉龍院庭園

変わった。こうして、移転することによって庭は大きく変わったが、従来の庭園の材料（景石のみ）とそのイメージが継承されたことには意義があり、移転後の庭園は森の作品とみなすことができよう。

唐招提寺の三暎庵露地と東室の庭園は森の自伝『庭ひとすじ』で紹介しているが、それぞれは異なる章で紹介されていることは興味深い。1966年に移転された蕪庵露地（三暎庵露地）は「昭和の作庭記」という章の中に描かれている。つまり、森の「作庭活動」の一事例として片付けられている。それに対して、1969年に移転された妙蓮寺玉龍院庭園（東室庭園）は「古庭園の発掘と復元」という章の中で描写され、南宗寺庭園、法金剛院庭園、和歌山城紅葉溪庭園など、歴史的な庭園の発掘と復元と並ぶ。まったく同じ「移転復原」であるというのであれば、森はなぜ分けたのだろうか。それは元々の庭園の歴史的な価値が違ふとみなしたからか。それとも、異なった方法で「移転復原」をしたからか。断言することはできないが、同じ「移転復原」の事業でも、蕪庵露地の移転は作庭家（作者）としての森の業績に分離され、妙蓮寺玉龍院庭園の移転は歴史家（学者）としての森の業績に分離されていることから、森の二つの側面を浮き彫りにしているとも言える。

6. おわりに

本項では、昭和期に活躍した歴史家であり、作庭家であった森蘊の業績に焦点を当てながら、建造物

の移築に伴う周辺整備（作庭）と庭園の移転（石材の移設）をめぐる諸問題について検討した。

建造物だけを移築をした場合、森は移築前の歴史を意識しながら「復興的作品」という王朝風、もしくは古風な庭をつくることもあったが、必ず移築後の場所（地形・歴史・周辺環境等）とその用途（使い方）に合わせて構想を練った。

庭園そのものを移転した場合も、森はいつも「移転復元」という言葉を利用しているが、実際には移転前の記録が残っていなかったり、または移転する素材を自由に取捨選択し、移築先で再構成することによって庭園に付加価値を与えた。

以上の事例に隔たりがあるが、森は常に地形と石材（庭石）を最も重視していたと言える。日本庭園史の研究を進めるなかで、森は植物よりも石と地形に重点をおいてきた。植物は時とともに変化するもので、過去の意匠や作風などの特徴を読みとるための参考にならないからだという。実際に、森蘊が残した多くの歴史的な庭園の実測図をみれば、建築物と石材と地形（等高線）が細かく描かれているが、植物が記録されているものが少ない。それは、森が目的としていた歴史的な庭園の「復元的研究」をするためには効果的な方法であった。庭園の本質的な価値は造営当初の「オリジナル」の形にあるという考え方に基づいた研究である。しかし、その場合は時代の積み重ねをどう考えるべきなのか。移築や移転をどう考えるべきなのか。

結局、様々な事例を分析した結果、一つの明確な方法論を提示することはできなかったが、建造物の移築と庭園の移転は「復元（復原）」「整備」「古材の再利用」「作庭」などの諸問題と深く結びついていることがわかった。概念としては明らかに異なっているけれども、現場では整備と作庭、整備と復元、復元と古材の再利用などの境界線が非常に曖昧で、完全に分別することが不可能である。建築史学においてすでに研究されてきた諸問題ではあるが、時代によってその解釈が変わるので、今後は体系的に研究する必要があると思われる²⁰⁾。

註

- 1) エマニュエル・マレス（編）2019『森蘊研究報告書 昭和の作庭記—森蘊の業績と日本庭園史の作成』綴水社 pp.219-234
- 2) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社
- 3) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.174
- 4) 森蘊 1964『日本の庭園』吉川弘文館 p.144
- 5) 森蘊 1960『日本の庭』朝日新聞社 p.131
- 6) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.182
- 7) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.183
- 8) 森蘊 1962『寝殿造庭園の立地的考察』奈良文化財研究所 pp.64-66
- 9) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 pp.179-180
- 10) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.195
- 11) 橿原神宮文華殿庭園は2016年に牧岡生一によって復元整備された。詳細は『橿原神宮文華殿庭園 復元整備の概要』（森蘊庭園研究室）を参照。2022年現在、文華殿は保存修理工事のため公開されていません。
- 12) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.205
- 13) 法華寺の庭園に関しては、『名勝法華寺庭園 保存活用計画』（2020年、光明宗 法華寺）と、『奈良市における庭園の総合調査』（2022年、奈良文化財研究所）を参照。
- 14) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.184
- 15) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.185
- 16) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.137
- 17) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 p.180
- 18) 詳細は下記の論文を参照。エマニュエル・マレス 2017年「妙蓮寺玉龍院庭園から唐招提寺東室庭園への庭園移転 - 森蘊による庭園遺構の移転復元 - 」日本庭園学会誌31号（pp.29-36）
- 19) 森蘊 1973『庭ひとすじ』学生社 pp. 139-140
- 20) 海野聡（編）2019『文化遺産と〈復元学〉』吉川弘文館

図版出典

図2 橋本聖圓氏撮影

図3 森蘊 1962『寝殿造庭園の立地的考察』奈良文化財研究所

図6・7 牧岡一生 2016『橿原神宮文華殿庭園 復元整備の概要』森蘊庭園研究室

図11 法華寺蔵

* その他、キャプションに記載のない写真、図面は全て、奈良文化財研究所蔵